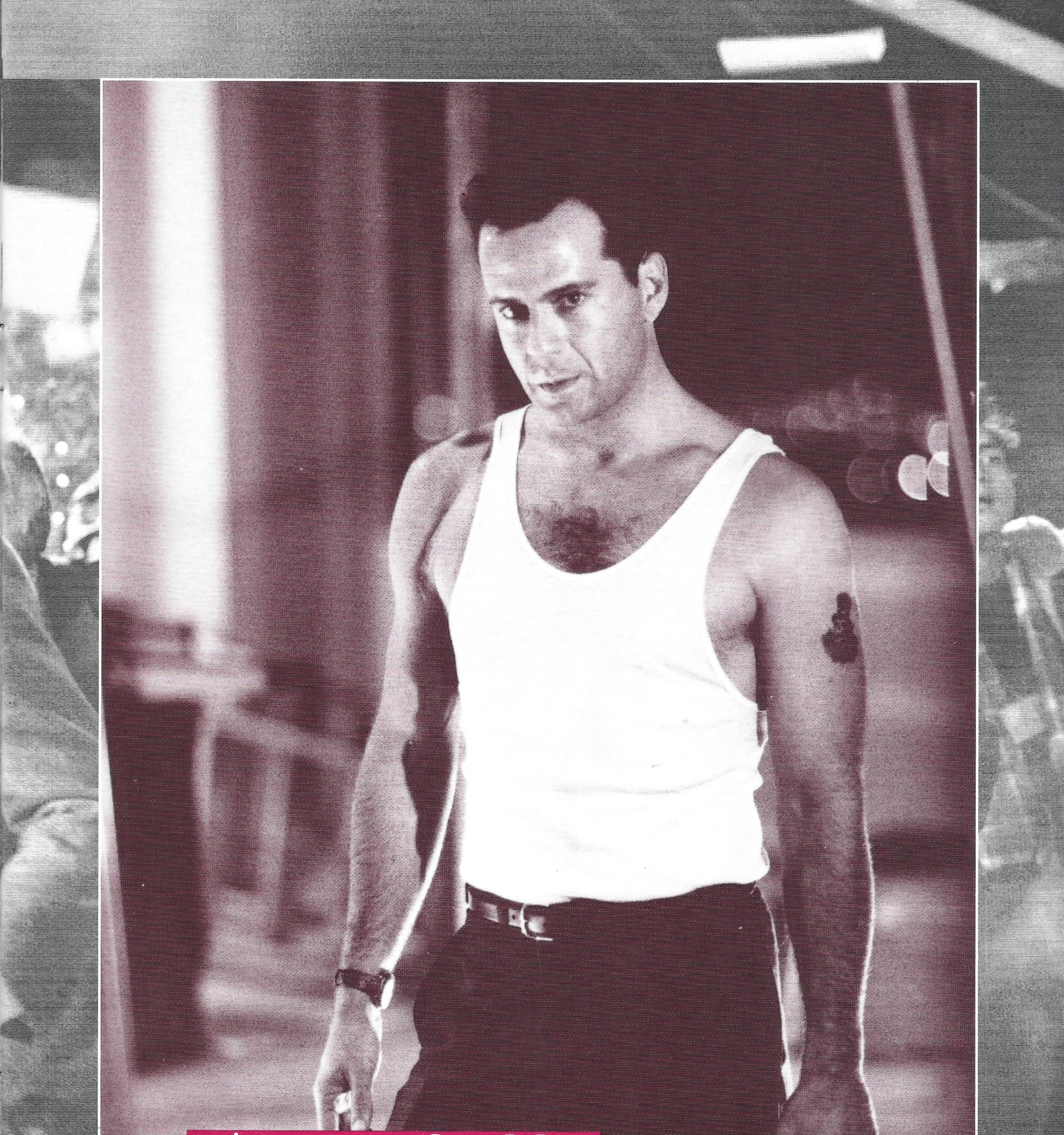


BRUCE WILLIS

DIE HARD


BRUCE WILLIS
DIE HARD
20世紀フォックス提供



ブルース・ウィリス

ダイ・ハード

ゴードン・カンパニー＝シルバー・ピクチャーズ製作/ジョン・マクティアナン・フィルム/ブルース・ウィリス"DIE HARD"アラン・リックマン/アレクサンダー・ゴドノフ/ボニー・ベデリア
音楽マイケル・ケーメン/視覚効果製作リチャード・エドランド/編集フランク・J・ユリオステ/ジョン・F・リンク/プロダクション・デザイン ジャクソン・デゴビア/撮影ジャン・デ・ボン
製作総指揮チャールズ・ゴードン/脚色ジェブ・スチュアート/スティーブン・E・デ・スーザ/原作ロデリック・ソープ(新潮文庫刊)
パナビジョン/カラー作品 PANAVISION DOLBY STEREO IN SELECTED THEATRES 製作ローレンス・ゴードン&ジョエル・シルバー/監督ジョン・マクティアナン

海外進出日本商社の6億ドルが、テロリストに狙われた！





INTRODUCTION

全米サマー・シーズン興行で、シルベスター・スタローン（ランボー3／怒りのアフガン）、アーノルド・シュワルツェネッガー（レッドブル）、クリント・イーストウッド（ダーティハリー5）の強力アクションが、この1作とのトップ争いに敗北を喫した。

すでにあきられはじめていたスーパーマン・ヒーローに対して、流行語にまでなった"ダイ・ハード・マン（絶対にくたばらない奴）"という、人間くさい血の通った男のガッツとアクションに、全世界が、いま熱狂的な拍手を送り、大ヒットの興収記録が、ぞくぞく樹立されている。

ニューヨークに単身赴任の刑事ジョン・マックレーンは、クリスマスの休暇を妻子と共に過ごすためロスにやってくる。

彼の妻ホリーは、海外進出めざましい日本の商社ナカトミ株式会社の女性重役というやり手。結婚と仕事を両立させることのむずかしさに悩み、夫婦関係は危機に直面している。

ナカトミ・ビルは、コンピューターで完全に管理された現代ハイテク技術の粋を集めた34階の高層ビル。クリスマス・イブで、ナカトミ社員30人が、30階で最高業績の祝賀をかねてパーティーをひらいていたが、このほかには受付以外、誰もいなかった。

突然、13人のテロリストによってビルは占拠され、社員は人質にとられた。あくどい商法の日本人に制裁を加えるというテロリストは、6億ドルの債券を要求してくる。

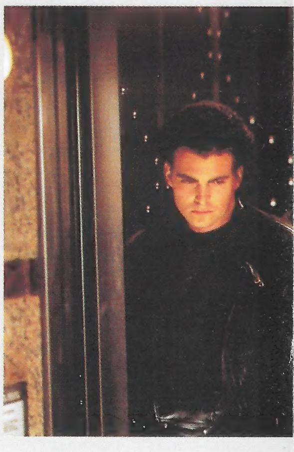
たまたま妻をたずねてきていたジョンは、この事件に巻きこまれる。ミサイル弾から最新鋭の銃器、さらに爆薬までそなえたテロリスト一味に、拳銃一丁だけのジョンは、妻への愛を賭けて、どう戦ったか？人質たちの運命は……。

事件を追って出動した警官隊の装甲車に向けて発射されるミサイル弾。ビルの屋上に人質を集めて爆殺を計るテロリストによって、ロスのクリスマス・イブは地獄の戦場と化す。かつてない斬新な着想でくりひろげられるアクション・スペクタクルの超大作である。

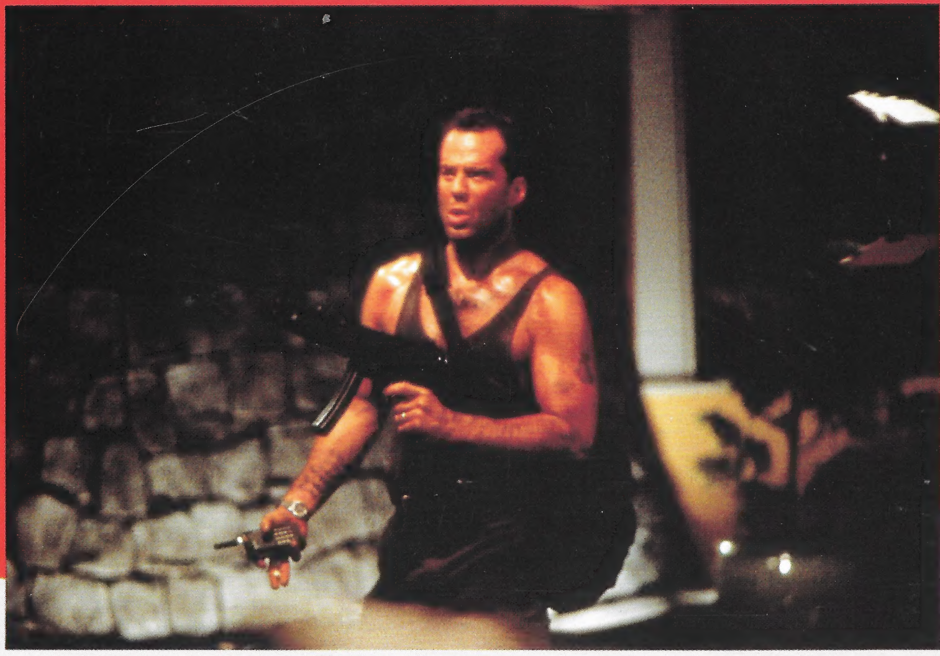
殊に、日本人にとっては、海外進出さかんな日本企業が乗っ取られるというナマナマしい現実感あふれる話で、企業家、商社マンたちの間に騒然たる反響を呼んでいる。日本人を、これほどリアルに、正確に描いたアメリカ映画は初めて、と高く評価され











ている。

マックレーン刑事を演じるのは、テレビ・シリーズ「こちらブルームーン探偵社」で、一躍、人気スターになったブルース・ウィリス。従来のイメージを破る体当りの熱演で、次期オスカー候補の呼び声があがっている。

妻のホリーを演じるのは、83年の"Heart Like a Wheel"で、アカデミー主演候補になり、「ひとりぼっちの青春」「ミリイ/少年は空を飛んだ」などで知られる演技派ボニー・ベデリア。

テロリストのリーダー、ハンスは、既成の悪役スターにない新鮮さを求めて、舞台出身のアラン・リックマンが映画デビュー。「刑事ジョン・ブック／目撃者」のアレクサンダー・ゴドノフが、クールな殺し屋役で迫力ある演技を見せる。

マックレーンと無線で連絡をとりあう間に、友情が生じてくる黒人巡査部長パウエルは、「クロコダイル・ダンディ」のレジナルド・ベルジョンソンが好演し、ドラマに深い感動を盛りあげる。

ほかに「ブレックファスト・クラブ」のポール・グリースン、「ゴーストバスターズ」のウィリアム・アザートン。「スーパーガール」のハート・ボックナー、「グーニーズ」「ゴリラ」のロバート・ダビ、「プレイス・イン・ザ・ハート」のデボロー・ホワイト、「トップガン」「ベスト・キッド 2」のクラレンス・ギルヤード・Jrなど、演技派が脇をかためている。

日本商社の代表を演じるのは、「ミッドウェイ」「ザ・ヤクザ」などのジェームズ・シゲタで、堂々たる貫録を見せる。

監督は、「プレデター」で一級の実力を認められたジョン・マクティアナンで、ダイナミックなノン・ストップ・アクションを、みごとに演出している。

プロデューサーのローレンス・ゴードン、ジョエル・シルバーも「コマンドー」「プレデター」を大ヒットさせた名コンビ。

ロデリック・ソープの小説をもとに、「48時間」「コマンドー」のスティーブン・E・デ・スーザが32歳のジェブ・スチュアート（次回作はLeviathan）と共同で脚色。「愛しのロクサーヌ」のジャクソン・デゴビアがプロダクション・デザインを担当。息もつかせない絶妙な編集は、「ロボコップ」でオスカー候補になったフランク・J・ユリオステと、「コマンドー」「プレデター」のジョン・F・リンクが共同で当った。

「ナイルの宝石」「殺したい女」のジャン・デ・ボンが撮影。特殊視覚効果は、「スター・ウォーズ」でアカデミー賞受賞のリチャード・エドランドと彼のボス・フィルムズのスタッフが総力をあげている。

音楽は「未来世紀ブラジル」「リーサル・ウェポン」のマイケル・ケーメンが書いているが、ベートーベンの第 9 交響曲"合唱"が、効果的に使われているのも話題。

ナカトミ・ビルは、ロサンゼルスの新名所センチュリー・シティのフォックス・プラザが使われ、ビルの内部は20世紀フォックス・スタジオにセットが組まれて撮影された。

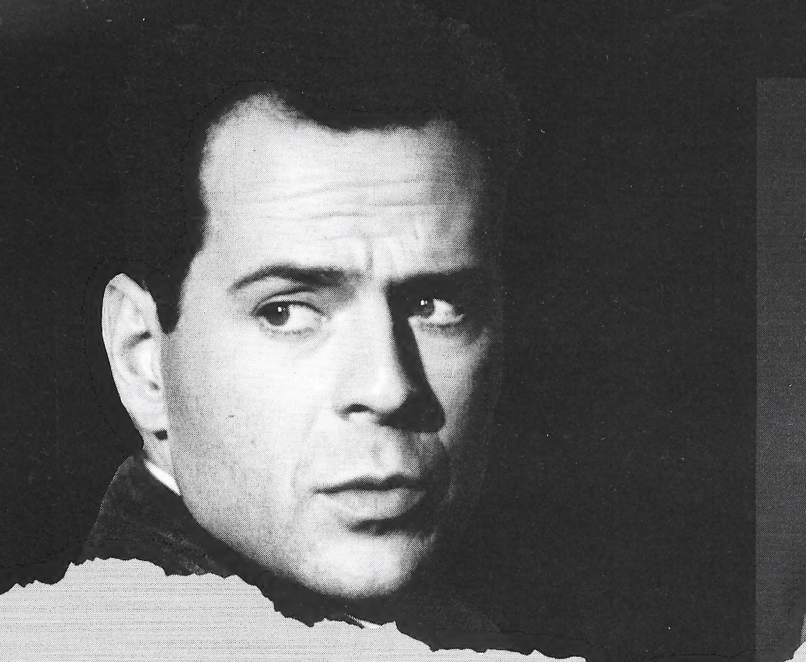
「ビバリーヒルズ・コップ 2」「プレデター」でも組んだ小道具主任のトミー・トムリンソンと、銃器スペシャリストのマイケル・パパックが集めたテロリストだけの最新兵器と、銃器も見逃せない。

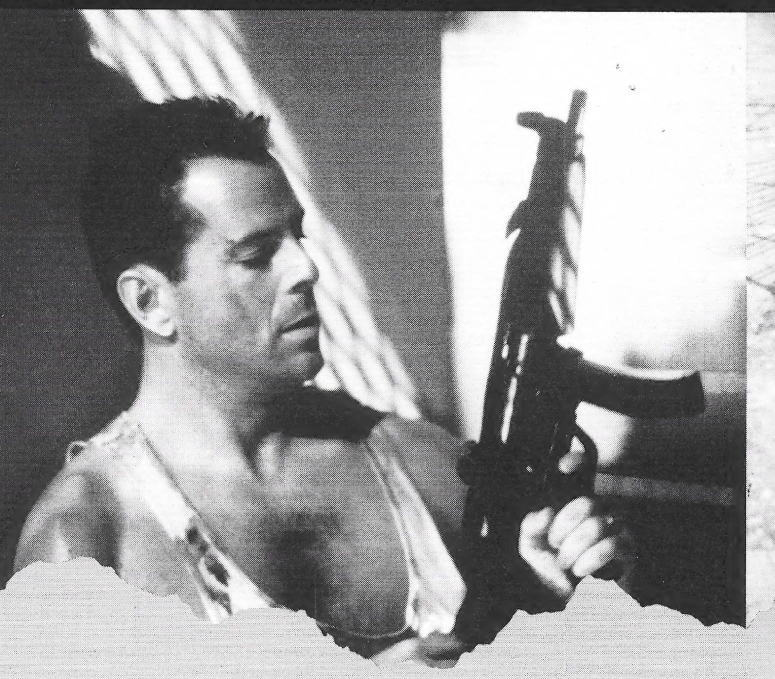
（1988年度作品／20世紀フォックス提供／ゴードン・カンパニー＝シルバー・ピクチャーズ製作／70ミリ／パナビジョン／ドルビー・ステレオ／カラー作品／ 2 時間10分）











STORY

コンピューターによる完全管理の40階超高層ハイテク・

ニューヨークの刑事ジョン・マックレーン(ブルース・ウィリス)は、クリスマスの休暇を、妻ホリー(ボニー・ベデリア)と、ふたりの子供がいるロサンゼルスで過ごすため、ロス空港に降りたった。

空港には、黒人運転手アーガイルが運転するリムジン車が迎えにきて、ホリーの勤務する日本商社ナカトミ株式会社のビルに案内していった。

海外進出めざましい日本商社が建設した34階建てナカトミ・ビルは、コンピューターで完全に管理され、1分のスキもない現代ハイテク技術の粋を集めたビルだった。

その日はクリスマス・イブで、日系のナカトミ以外はすべて休暇、ビルには受付係のほかは誰もいなかった。ただ30階では今年、最高の業績をあげたナカトミの社長タカギ(ジェームズ・シゲタ)を中心に、30人ばかりの社員が慰労をかねたパーティーを開いていた。

ホリーは、ナカトミ社の女性重役で、仕事のできることでは社内でもNo.1のすご腕で、社長の信頼も厚かった。単身赴任の夫との結婚生活は危機に直面し、仕事と結婚を両立させることのむずかしさにホリーは悩んでいたが、再会したジョンを前にすると、まだ愛が消えていないことを知った。

パーティーも盛りあがった頃、1台の大型車に乗った13人のテロリストが、ビルに侵入してきた。いきなり受付の男を射殺すると、29階までを完全に封鎖。すべての電話線を切断した。

パーティー会場は、銃声と共に侵入してきたテロリストにより、大混乱となったが、リーダーのハンス・グルーバー(アラン・リックマン)は、タカギに金庫に眠る6億4千万ドルの譲渡可能な無記名の債券を要求してきた。「日本商社のあくどい商法に制裁を加えるのだ」と、ハンスは言った。

タカギが応じないと知ると、ハンスは彼を射殺した。その現場を偶然、ジョンは見てしまったが、逆にテロリストの1人トニーに発見された。32階まで追ってきたトニーと格闘し、階段から突き落して死亡させたジョンは、トニーの死体をエレベーターで、パーティー会場のハンスの前に送りつけた。テロリストたちは、人質にとった30人以外の、眼に見えない人間の存在におびえ、2人のテロリストが階上に追っていった。通風口の中を逃げるジョンを銃で撃ちまくったが、ついに2人ともジョンに射殺されてしまった。

ジョンは、トニーの持っていたマシンガン、爆薬、無線をいただき、屋上に出て無線で警察に連絡をとった。

さっそくビルの近くをパトロール中のパウエル巡査部長(レジナルド・ベルジョンソン)が、ビルの受付にやってきたが、受付係に変装したテロリストによって追いかえされた。異常なし、と出ていくパウエルのようすを、いらいらしながら見守っていたジョンは、窓をたたき壊し、彼のパトカーめがけて射殺した男の死体を投げつけ、銃を放った。

「ビルから撃ってくる！応援よこせ！」

パウエルからの連絡で、テロリスト一味を鎮圧のためドウェイン・ロビンソン警視が、総指揮を取る警官隊が出動した。ロビ







ビルに閉じこめられた30数名の人質の運命は⁉

ンソンは装甲車でビル突入を命じたが、テロリスト側はミサイル弾をぶちこみ、装甲車は一瞬に吹っ飛び、さながら地獄の戦場と化してしまった。テレビ局がスクープを追って動きだした。

ジョンはパウエルと無線で話しあううち、彼に友情を感じてきた。一方、ハンスはジョンに無線で、起爆剤を返してくれと申し込んできた。

FBIも動きだした。ハンスは西ドイツの過激派グループのリーダーであることがわかった。彼は"アジアの曙"グループの5人をはじめ、カナダなど世界各国のテロリストの釈放を求め、2時間以内に屋上にヘリで集結させるようFBIに要求する。

ビル内で、ハンスはジョンを追いつめ、彼が素足だったことを知ると、ビル内のガラスを撃ちまくるよう、部下のカール(アレクサンダー・ゴドノフ)と、フリッツに命じた。ガラスの破片が、雨あられとなってジョンに降りそそいできた。足には破片が突きささり、全身に血まみれの傷を負ったジョンは、トイレにかけこみ、やっと足からガラスの破片を抜きとった。

その頃、黒人で電磁ロック破りのプロであるテオが、ついに暗号を解読しロックを開けた。6億ドルの債券は、テロリスト一味のものとなった。

血まみれのジョンは、カールと対決した。カールは弟のトニーをジョンに殺されたことから復讐に異常な執念を燃やし、ふたりは肉弾あいうつ大格闘となった。だが近くにあったチェーンを首に巻きつけられたカールは首つり状態になり、ジョンは勝った。



ハンスは人質をすべて屋上に集結させた。残忍非情な彼は、債券を奪い取ると、全員を爆殺して逃亡しようとしていた。

そうとも知らず屋上に追いやられる人質たち。FBIは武装ヘリでビルに近づいてきた。

テレビ局が、ホリーの子供を画面に登場させ、両親に話しかける映像を流した。それを見たハンスは、初めてホリーがジョンの妻であることを知った。ホリーはハンスに捕えられた。ハンスはホリーに銃口を突きつけてジョンの前に現らわれ、ジョンを脅して起爆剤を奪い返すと引きあげて行った。ジョンは、屋上にかけ上る人たちに、「階上は爆弾が仕掛けられている!」と叫んだ。

30人の社員たちは、今度は悲鳴をあげ、われ先にと階下に向かいパニック状態となっていった。

階上の爆破は刻一刻とせまっていた。ジョンは、消防用ホースでしっかり体をしばりつけ、ビルの階上から捨身のダイビングをし、33階の窓ガラスをぶち破って飛びこんで危機一髪、助かった。その瞬間、大音響と共にビルの階上は爆発した。

逃亡車に債券を積みこみ、逃亡を急ごうとするハンスと、生き残りの一味。しかもホリーは、ハンスに捕えられている。

愛する妻を捕えられたジョンは、なんとしてもホリーを助けださなければならない。しかし、彼の手もとに弾丸は、たった2発しか残っていなかった。

ダイ・ハード・マンの男の意地を賭けて、ジョンは、遂にハンスと対決する。

地上40階!超高層ビルは戦場と化した!



●プロダクション・デザイナーのジャクソン・デゴビアがナカトミ社のインテリアを作るという作業にあたったのはフォックス・プラザの使われていない33、34階だった。彼はこう言っている。

「日本は世界で一番モダンな国になり、ある意味で我々の夢の支配者でもある。だから、ナカトミのセットはボンド・ムービーのように派手に、かといってあまりちゃちにしていない。ジョエル・シルバーに言わせれば、『誇張したリアリズム』だそうだ」

東京の帝国ホテルを設計したので有名なアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが設計した家を二つ











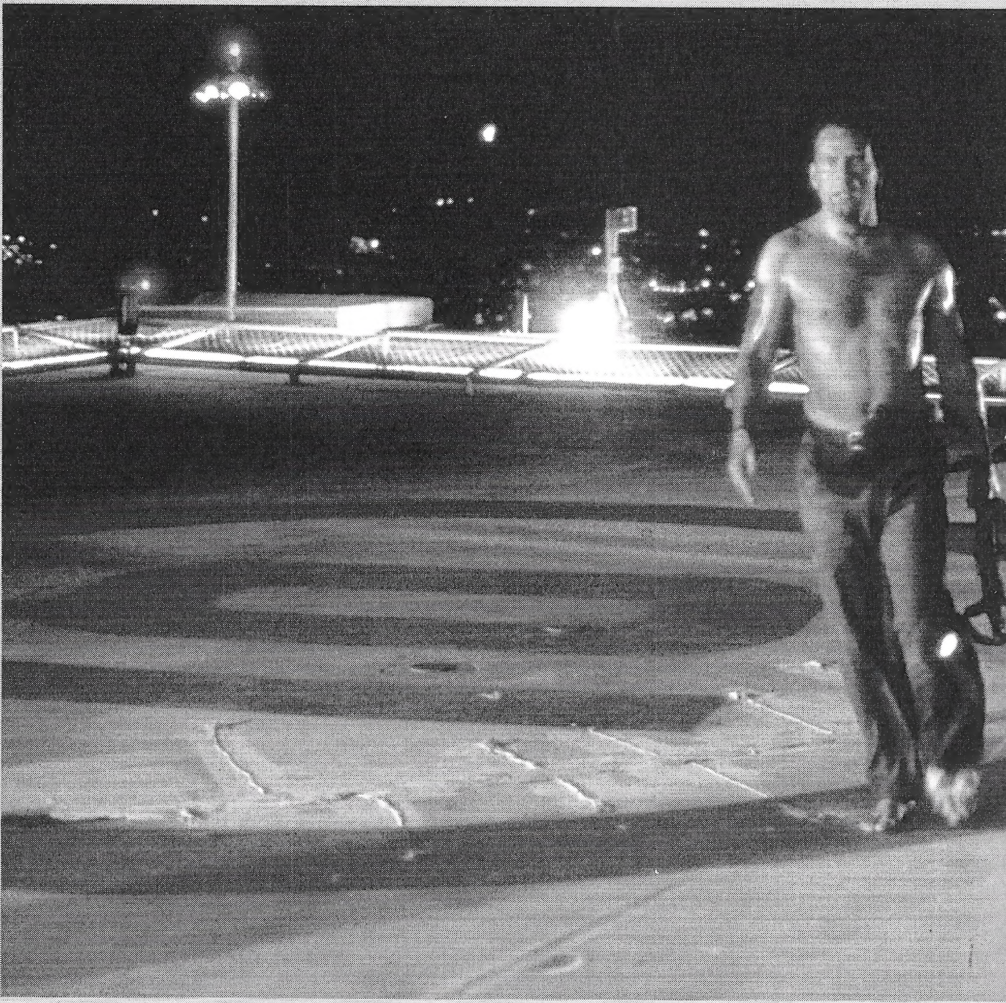


自分の持ち物にしているシルバーは、ナカトミ社のセットにライトの影響をもちこみたかった。撮影に入る前にデゴビアは、ライトに関する本を読みあさり、ついにライトが40年代にサンフランシスコ湾近辺に橋を作ろうと考えていた時の小さな模型があることを知った。

もっとよく調べているうちに、デゴビアはついにその模型が現存していることをつきとめた。シルバーはアリゾナ州のライト博物館からその模型を借り、それは広々としたナカトミの重役室の目をひく展示物となったのだ。

靴を脱ぐヒーロー

増淵　健



チュウチョなく“面白い”といえる何年に1本の快作である。これぞエンターティメント／最新設備のインテリジェント・ビルをテロリストが乗っ取り、クリスマス・パーティを催していた商社員が人質にとられる、というストーリーは、火の気のない「タワーリング・インフェルノ」のようだが、ドラマとしての完成度ははるかに高い。面白いだけでなく、骨組みがガッチリしていて、虚構を虚構と感じさせない。

ということは、シナリオがよく出来ているのである。見過ごしてしまいそうな、さりげない描写があとになって意味をもってくる。その結果、登場人物の人柄からものの考え方まで、クッキリあぶり出されるのだから、みごとだ。奇跡を見るような気がする、といっても、決していいすぎではない。

たとえば、主人公のマックレーン（ブルース・ウィリス）がロスへ向かう飛行機の中で素足になって歩き回るシーンがある。最初は、風変わりな中年男のヘンな癖、といったものだが、実はそうでないことがわかる。テロリストとの戦いのさなか、素足になるからだ。死ぬか生きるかのサバイバルの中でも、このヒーローは靴を脱ぐのである。

ここで、私たち観客はマックレーンが靴を脱ぐという行為を通し、ともすれば弱気になる自分自身を励ましていることに気付く。飛行機で素足になったのは、別居中の妻に帰って来て欲しいと頼む“苦役”が待っていたからだった。靴を脱ぐと気が安まる、といったなまやさしいものではない。生きざまにかかわる重要な儀式を、彼は行なっていたのだ。

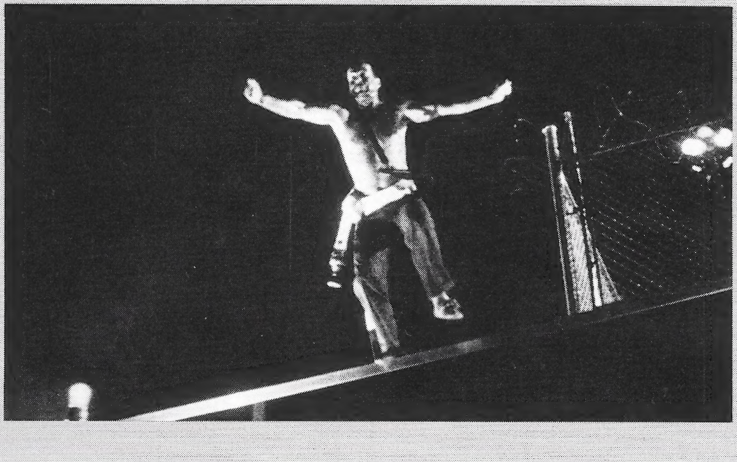
マックレーンが素足なのを知ったテロリストが壁面のガラスを射つシーンがとどめになる。アクション映画の数あれど、こんなシーンは見たことがない。思えば、素足のヒーローそのものが、ターザンを除いて、存在しなかったのである。それを、あえてやってのけたのだから、ほめ言葉以外見当らない。

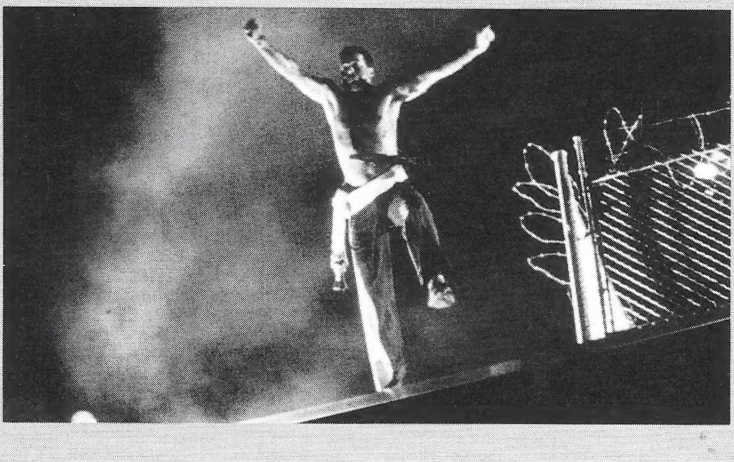
ことほどさように、すべてのカットが伏線の役をしていながら、しかとはわからない仕掛けになっている。天災ではないが、“忘れた頃にやってくる”のが、この映画のカタルシスだ。

とはいえ、どれもデテールの面白さである。「ダイ・ハード」の真価は、テロリストと人質プラス・ワンという対決の構図を考え出した点にある。デテールの前に、トータルでズバ抜けているのだ。

「ダイ・ハード」以前のいわゆるディザスター映画は、テロリスト対人質の戦いをベースにして、救出作戦をクライマックスに置くのがパターンだった。「ダイ・ハード」の場合、たまたま別室に1人の男がいたという設定がタダゴトではない。テロリスト対人質の関係が、マックレーンという“闖入者”のおかげで多面的、立体的になった。たった1人増えただけなのに、ストーリーが厚みとふくらみをもつことになったのだ。

マックレーンには、人質の中に別居中の妻ホリー（ボニー・ベデリア）がいて、彼女とヨリを戻しに来たという事情がある。脱出しようと思えば出来るが、男として引き下がるわけにはいかない。それに、非番で管轄外とはいえ、彼は警官である。人間として職業人として、ビルにとどまって戦わなければならな









い運命にある。

感心するのは、人間関係が多面的・立体的になって、ストーリーがフクザツになったかというと、そうではないことだ。マックレーンの妻が人質の中にいることが、いつテロリストにバレるかというサスペンスで、グイグイ引っ張っていく。

彼とホリーの関係は、彼女と親しい何人かの社員しか知らない。テロリストがそれを知ったら、ホリーを押えて次々に難題を出してくるだろう。彼女がマックレーン夫人であることは、絶対に隠さなければいけない。そのためには、マックレーンの名前も身分も割れてはいけない。なにしろ、相手は、ハイ・テクの専門家を抱え、OAのカタマリのようなビルを制圧している。どんな片々たる情報も、彼らの手に渡ったら、最後である。

サスペンスフルな見せ場は、二つある。最初は、人質の1人がマックレーンを説得してやるとテロリストに取り引きを申し出るくだりだ。その男は、ホリーに惚れていて、会社へマックレーンが訪ねてきた時、顔を合わせている。マックレーンが刑事であることも知っている。助かりたい一心で、洗いざらいブチまけかねない。しかし、彼は一味のリーダー、ハンス(アラン・リックマン)を怒らせ、射殺される。

第2の見せ場は、マックレーンが丸腰のハンスとハチ合わせするくだりだ。ハンスは、脱出した人質になりすます。マックレーンも味方と思って、身上話を始める。実はマックレーンの方が役者が上だった、というのが、このシーンのオチである。

どんなによく出来たシナリオでも、ビルの中に限られた空間でのひと握りの人間たちの戦いである。見ている私たちにしても、テンションを持続するのは容易ではない。そこで、ものをいうのがプラス・ワンのマックレーンであり、彼とホリーの関係だ。いつバレるか、という興味がテンションを持続させる働きをする。

アクションは、一過性の刺激である。アクションを売り物にした映画も、決め手はストーリーだ。「ダイ・ハード」は、サスペンスをドラマのタテ糸にして、ヨコ糸でアクションを編みこんでいる。サスペンスが常にベースにあるからテンションが途切れない。しかも、デテールに対する計算が緻密である。ホリーが結婚前の姓で勤めていることを、彼女自身の口から弁明させたのは、その一例だ。マックレーンの姓では、早晩バレる道理で、そこのところをソツなくカバーしている。しかも、ニクいではないか？ホリーに、こんなことをいわせている。

「ミセスよりミスの方を雇いたい、と思うでしょう」。ただのツジツマ合わせではなく、ドラマの中で生きるように計算している。

ところで、サスペンスのタテ糸は、突然、切れる。テレビ局の取材班がホリーの自宅へ押しかけ、現在の姓がマックレーンであることを暴露してしまう。この呼吸も、みごとという外ない。サスペンスフルな2つの見せ場のあとに、スリリングな第3の見せ場を置いて、一気にクライマックスへもちこむのである。ハンスがホリーに銃をつきつけ、マックレーンに「グレース・ケリーとジョン・ウェインだな」というとマックレーンが、「ウェインじゃない、ゲーリー・クーパーさ」。「ランボーかウェインか」とハンスにからかわれ、「ロイ・ロジャースが好きだったよ」と答える前半のやりとりが、ここで生きてくる。よくあるタイプのお遊びと思わせておいて、チャンとオチをつけている。「真昼の決闘」の悪玉アイアン・マクドナルドを気取るハンスをやりこめるマックレーンは、人間臭いクーパー保安官と通じるものがある。

くり返すが、よく出来たシナリオである。クレジットによると、ジェブ・スチュアートとスティーブン・E・デ・スーザが脚色。覚えておきたい名前だ。















ダイ・ハード・マン
〈絶対にくたばらない奴〉のガッツが
いま、愛する妻への
熱い想いを胸に、爆発する！

ブルース・ウィリス
Bruce Willis

映画出演第3作目で、はやくも500万ドルの出演料を手にした異例のスピード出世で、話題を呼んでいる「ダイ・ハード」のブルース・ウィリスは、89年のスーパー・スターとしてクローズ・アップされている。

スタローンなどが演じるスーパーマン・アクションが、あきられ始めていた時期に登場した人間くさく、リアルで、観客がヒーローと一体化してしまう強烈な新しい人間像を、体当りで熱演。〝ダイ・ハード・マン〟の流行語を生みだした男。

愛する妻のために、13人のテロリストを向こうにまわして、ハードにタフに力の限りをつくして闘いぬくジョン・マックレーン刑事。次期アカデミー賞候補になるだろう、という批評家からの絶讃の声もあがっている。

55年3月19日、軍人だった父の任地ドイツで生まれ、2歳でニュージャージー州カーニーズ・ポイントにもどった。ハイスクール卒業後、地元のデュポンの工場で働きながら、バーでハーモニカを吹き自らバンドを組んで出演。ハーモニカはプロ級の腕を持っている。

モントクレア州立カレッジに学び、81年に〝Railroad Bill〟で舞台出演。バーテンをしたり、リーバイスのCMに出たりし、サム・シェパードの舞台「フール・フォー・ラブ」がロングランのヒットになった。

エージェントのすすめでテレビ・シリーズ「こちらブルームーン探偵社」のオーディションを受け、シビル・シェパードの相手役を射とめスターになり、日本でも人気が出た。

映画は87年「ブラインド・デート」でデビュー。全米では4000万ドル以上の興収をあげる大ヒットになり、88年〝Sunset〟についで、「ダイ・ハード」に主演。

次回作は、ノーマン・ジェイソン監督が、ベトナム帰還兵をテーマにした〝In Country〟で、エミリー・ロイドと共演する。

87年11月21日、「第7の予言」のデミ・ムーアと結婚して話題を呼んだ。







優れたアクション映画にはちゃんとした小道具としての武器『銃』がもうひとつの主役。ここでは主人公ジョン・マクレーン（ブルース・ウィリス）の使用した３つの武器を説明します。と、同時に見逃してはいけない必見ポイント・シーンをガイドします。

まず、最初から最後まで彼と運命を共にするベレッタ92F。ファーストシーンの飛行機の中で肩から吊ったショルダーホルスターに収まった92がチラッと初登場。

S1　ジョンはダクトの中で真下にいるアレキサンダー・ゴドノフを狙うために「カチチッ」と92のハンマーを起こす。92はダブルアクション（DA）と言う機構を採用しているので本来ならばハンマーを起こす必要はない。DAは引き金を引くだけで撃てる。それなのになぜハンマーを起こしたのか？　これはDAだと焦って引金をガク引きすると銃身が右にブレて弾着が右に逸れる可能性がある。シングルアクション（SA）は引金を少し絞ってハンマーを落とすだけ、銃身のブレは少ない。より正確な射撃ができる。ここでジョンがハンマーを起こすのはゴドノフを１発必中で狙うためなのだ。さらにその方が観客の緊張が増すのである。ゴドノフが行ってしまうとハンマーを元の位置に戻す。こーすると緊張が若干、和らぐ。これは西部劇ウエスタン以来の伝統である。このDAは後で大いに役に立つのだ。

S2　消火用ホースを体に巻きつけて決死のダイブ。ベレッタ92Fを連射して窓ガラスをぶち破り助かる。従来、口径９ミリは45口径に

“Innocent Black”“But Never Jam Today”があり、映画の新作に“Magic Sticks”“Plainclothes”などがある。



ポール・グリースン
Paul Gleason

アル・パウエル巡査部長の上司ドウェインを演じる。状況のヨミが甘く事態をますます悪化させてしまう。

「大逆転」のスパイ役、「ブレックファスト・クラブ」の高校校長役など、近年めざましい活躍を見せている性格俳優で、「アパッチ砦／ブロンクス」「ミスター・アーサー」「パパ」などがある。

新作は、ケビン・ベーコン主演“She's Having a Baby”。



ウィリアム・アザートン
William Atherton

視聴率かせぎとスクープ狙いで、ジョンの妻の素性をあかしてしまうテレビ・レポーターを演じる。テレビの無責任さを批判する作者の眼が鋭い。

47年7月30日、コネチカット州生まれ。パサディナ演劇学校に学び、舞台をへて72年「センチュリアン」で映画デビュー。スピルバーグの「続・激突／カージャック」の主役でスターになる。主な作品は「イナゴの日」「華麗なるギャツビー」「ヒンデンブルグ」「ミスター・グッドバーを探して」などがある。

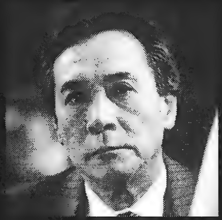


ハート・ボックナー
Hart Bochner

ホリーの同僚でナカトミ社の重役エリスを演じる。余計な交渉をして命を落す。

19歳の時、フランクリン・J・シャフナー監督にスカウトされて「海流の中の島々」で映画デビュー。

カリフォルニア大学サンディエゴ校を卒業後、本格的に俳優をめざし、「ヤング・ゼネレーション」「ベスト・フレンズ」「スーパーガール」などに出演している。



ジェームズ・シゲタ
James Shigeta

ナカトミ社の代表タカギを演じる。日本商社の海外進出めざましい今日、これほど堂々と日本人をアメリカ映画で名演した俳優は初めて、と高い評価を受けている。

ハワイ生まれの日系二世で、ハワイのナイト・クラブで歌手としてデビュー。シャーリー・マックレーン共演のショウでハリウッド・デビュー。映画、テレビ、レコード、クラブ出演と大活躍。

映画は「ハワイアン・パラダイス」「フラワー・ドラム・ソング」「嬉し泣き」「失われた地平線」「ザ・ヤクザ」「マッカーサー」「ミッドウェイ」などがある。

2回目に見る時が2倍楽しくなる解説

ダイ・ハード評論家　小峯　隆生

比べてパワー不足と思われてきた。しかし、火薬の改良によって9ミリ弾はパワーアップした。これが22口径のひ弱な銃だったならばジョンの運命もあそこで終わりだ。貫通力に優れた9ミリ弾はぶ厚い高層ビルの窓ガラスでも紙のようにぶち抜く。同時にもしこの状況でSAのオートを持っていたらどーなっていたか？　左手か右手の親指でハンマーを起こさなければならない。そんな事を地上100mで宙吊りになって焦っている時に出来る野郎は少ない。DAのベレッタ92Fだからこそ、ジョンは抜くと同時に片手で発砲してガラスをぶち抜けたのだ。

S3　テーブルの下に追詰められたジョンは一瞬の隙をついてテーブル上のテロリストを「バババ」と速連射で片付ける。

リボルバーは6発しかないが、92は2.5倍の装弾数15発。敵に対して弾の大バーゲンセールが出来る。接近戦で多人数を相手にする場合は弾数の多い方が有利。この映画はベレッタ92Fの特性を全て引き出して有効に使っている。

2番目の武器は後にジョンも奪う事になるテロリスト御用達のマシンガンH&K・MP5だ。口径9ミリ、装弾数30発。劇中で使用されているのは初期型のMP5A3に最新型の三角型のフォアグリップを装着したもの。

S4　13人のテロリストがエレベーターで30階まで登る時に次々とMP5が登場する。もし、この時テロリストが狭いエレベーターの中で全長2m、重さ10kgのライフルを持っていたらどーなるか？　かさばるわ、ガチャガチャ当たるわで、ハンス・グルーバーは涼しい顔はしていられない。それに素早い身の動きが出来ないだろう。その点、MP5A3ならば全長50cm(ストック収納時)重さは2.8kg、短くて軽い、狭いビルの中では戦い易い銃だ。

S5　1階の入口付近から進入しようとするSWAT隊員をテロリストはストックを伸ばしたMP5で次々と狙撃する。

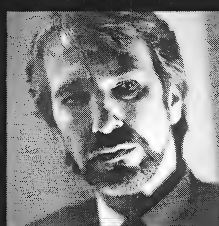
マシンガンは近距離でバリバリと撃ちまくるだけが能ではありません。MP5は命中性能は驚く程良い。僕も120発ほど実射した時、驚いた。本当に良く当たる。50m先の空き缶にチョイと練習すれば射手の腕よりMP5の性能で当てられる。MP5は近距離ならば狙撃が可能である。映画ではテロリストはSWAT隊員の肩とか足を狙う。どーして射殺しないかと言うと、戦闘中は死んでしまえばその場に置いとく。ところが、負傷した場合は後方に他の隊員が運ばなければならない。すると一人の足を狙撃すれば一人が助けて後方に退く。1人を撃てが最前線から2人の兵力を減らす事が出来るのだ。

S6　ジョンがハンスにMP5を突き付けているとエレベーターのドアが開くと同時に敵が飛び出そうとする。ジョンは素早くMP5をフルオートで掃射し、先頭の敵を射殺する。

一見、何でもないシーンだが重要です。フルオートは何よりも初弾が出ないと意味が無い。「ノー・セカンド・チャンス」と言われる程、近距離のコンヴューティングでは「1発目に当てる」ことが大切。もっと大切なのが1発目に不発がない事。このMP5の発射メカニズムのローラーロッキング・システムは100%近く不発が無い。突然の敵に対してMP5程頼りになる奴はいない。また、撃った時の反動は少ない。ほとんど無いに等しい。このお陰でフルオート時の銃の狙いのコントロールがしやすいのである。M16アサルトライフルの場合はフルオートの場合、3発目からどこに弾が行くかわからないが、MP5はどこに行くか、ちゃんとわかる。

3番目の武器は『ガッツ＝根性』です。これが今回の最大の武器である事は見た方は納得するはず。絶対に無くなる事のないガッツこそ最大の武器だったのです。

この舞台となったナカトミビルはロスアンゼルスのセンチュリーシティの中にあるフォックス・プラザビルでロケされた。僕は実際に行ってみましたが、アレクサンダー・ゴドノフのよーにすんなりは侵入出来ませんでした。侵入後、3分でガードマンに捕まってしまいました。警備は万全です。



アラン・リックマン
Alan Rickman

外見はソフトだが、残忍で非情、簡単に人を殺してしまうテロリストのリーダー、ハンス・グルーバーを名演。

悪役スターの既成イメージではない新鮮な俳優を求めて、87年、舞台〝Les Liaisons Dangereuses〟でトニー賞最優秀男優賞候補になったアランの演技を見たジョエル・シルバーが今度の大役に抜擢。これがアランの映画デビューとなった。次回作はケビン・クライン共演〝January Man〟が決定している。

20代前半は美術学校に通いグラフィック・デザインの仕事をしていたが、26歳でロイヤル・アカデミー・オブ・ドラマティック・アーツに入学。卒業後はロンドンの演劇界で活躍。ロイヤル・シェークスピア・カンパニーの新しいスターとなり、ロンドンのウェストエンドの舞台で、ブロードウェイに進出。

テレビはBBCテレビのシリーズ〝The Barchester Chronicles〟が有名。



アレクサンダー・ゴドノフ
Alexander Godunov

ブロンドのテロリスト、カールを演じる。弟をジョンに殺された私怨を爆発させ、ふたりが肉弾あいうつ大格闘を演じるシーンは、見せ場の一つ。ラストでは、アッと驚く仕掛けもある。

サハリン島で生まれ、リガで育った彼は、70年にボリショイ・バレエ団に入り、「白鳥の湖」のジーグフリード役につき、73年のモスクワ国際バレエ大会で一等賞を受賞。現代最高のバレエ・ダンサーとなる。

74年、アメリカ初公演。5年間、ソ連国外旅行を許可されず、79年のニューヨーク公演の時に、ついに亡命を決意。

アメリカン・バレエ・シアターに所属したが、82年のニューヨーク・メトロポリタン公演を最後に、自らのバレエ団を率いてツアーを行った。

映画は、「刑事ジョン・ブック／目撃者」でデビューし、「マネー・ピット」ではオーケストラ指揮者を演じ批評家から絶讃された。



レジナルド・ベルジョンソン
Reginald Veljohnson

黒人の巡査部長アル・パウエルを演じる。無線でジョンと連絡をとりあう間に2人は、いつしか熱い友情で結ばれていく。映画のなかでもヒューマンな感動を後半で、いっきに盛りあげていく。

「クロコダイル・ダンディ」のリムジンの運転手マックス役で、世界的に有名になったブラック・スター。

ニューヨークに住み、舞台とテレビで活躍。舞台には〝Honky Tonk Nights〟



ボニー・ベデリア
Bonnie Bedelia

日本の商社ナカトミの女性重役で、切れものの実力で出世街道を驀進。2女の母だが、ジョンとの結婚生活は、危機に直面。仕事と結婚を両立させることのむずかしさに悩んでいるホリーを演じる。

83年の〝Heart Like a Wheel〟で、アカデミー主演女優賞候補になった演技派美人女優。

映画デビューは、69年の「さすらいの大空」だが、「ひとりぼっちの青春」「ふたりの誓い」「死霊伝説」「すみれはブルー」「ミリイ／少年は空を飛んだ」などで好演技を見せているベテラン。

マンハッタン生まれで、4歳の時からバレエを学び、9歳でオフ・ブロードウェイの舞台に立っている。

12歳でテレビの昼メロにも出演。77年のシリーズ〝The New Land〟では主役をやり、舞台の〝My Sweet Charlie〟ではテアトル・ワールド賞を受賞。ロサンゼルスの舞台では、マーチン・シーンやルイス・ゴセット・ジュニアらとレパートリー劇団に所属して活躍。





PRODUCTION NOTES

●「プレデター」でもチームを組んだ特殊効果のエキスパート、アル・ディ・サッロは、撮影中に起こるありとあらゆる爆発の仕掛けを担当した。何といってもそのハイライトは、センチュリー・シティのフォックス・プラザの階段で装甲車を爆破する作業だった。破片が散らばり、炎上したヘリが地上でバラバラになり、その破片があちこちで燃えあがって、ビルが廃墟と化した最後のシークェンスの撮影は、フォックス・プラザで行なわれた。

いかにこのビルが撮影に最適であったとはいえ、ビルは町中にあったし、ロケーション・マネジャーのジョエル・マックスにとってはとてもこなせそうにないシークェンスもあった。特に、何台ものヘリコプターが地上15メートルの低空で時速120キロでセンチュリー・シティを突っきり、フォックス・プラザの前で急上昇するとなるとなおさらだ。この撮影は日曜日に道路に12台のカメラを設置し、ロサンゼルス警察がサンタモニカ・ブールバードとピコ・ブールバードの間を道路封鎖して行なわれた。

●またスタント・コーディネイターのチャーリー・ピサーニはこのビルが、「ダイ・ハード」の跳びおりスタントをやるには最適の場所であることを知った。中でも、ブルース・ウィリスのものすごい6メートルのジャンプ、アラン・リックマンの同じ6メートルのジャンプをやるにはだ。もちろん､地上ではエアー･バッグが2人を待ちかまえていた。ふたりはスタント・マンなしに、命取りにもなりかねないジャンプをやりとげた。



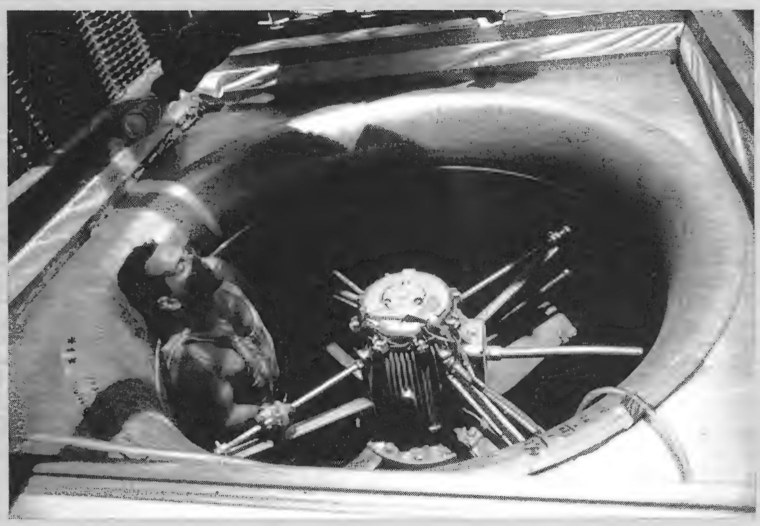






スリル満点！
ド迫力のノン・ストップ・アクション
「ダイ・ハード」

垣井　道弘





うーん、まいった。

ドンパチ、ドカーン／ずいぶん派手にやってくれるじゃあないか。スリル満点。これぞド迫力のノン・ストップ・アクションだ。銃撃戦からミサイル攻撃、ビルの屋上爆破、ラストの対決まで見せ場、また見せ場の連続である。ついつい両肩に力が入り、ドッと気分よく疲れてしまった。

12月24日の夕方。ブルース・ウィリス扮する刑事ジョン・マックレーンは、別居中の家族と休暇を過ごすため、ニューヨークからロサンゼルスにやってくる。楽しい休暇になるはずだった。ところが、待ちうけているのは映画史上でもおそらく最も過激で壮絶なクリスマス・イブなのだ。

舞台になる超高層ビルは、海外進出の盛んな日本商社、ナカトミの所有という設定になっている。このハイテク・ビルを、武装した13人のテロリストが占拠。パーティ会場にいた30数人を人質にする。コンピュータで管理されたハイテク・ビルは、ちょっとした現代の要塞である。ところが、そのハイテク技術を逆手に取れば、意外にもろい。便利なものには欠点があるという皮肉だろう。

さて、たまたま事件に巻き込まれてしまったジョンはどうするか。ナカトミの有能な重役である妻ホリーも、テロリストの人質になっている。ジョンの職業は刑事だが、ダーティハリーやブリットではない。飛行機に乗れば高所恐怖症でビビるし、別居した妻にはグチグチ不満を言う、ごく普通の男である。その普通で身近な男の、予想外の大活躍がこの映画のおもしろさなのだ。

いっぽう13人のテロリストは、最初からやたらカッコいい。よく訓練されたプロフェッショナル集団である。超高層ビルの地下駐車場にトラックで乗りつけ、ビルの受付をしている男をいきなり射殺。電話線を切断し、エレベーターを止め、あっという間にビルの29階までを占拠してしまう。そして、パーティ会場に現われるや、ナカトミの社長タカギに6億4千万ドルの債券を要求する。要求に応





じないタカギをあっさり射殺するが、それもそのはずメンバーのなかには金庫破りのプロもいるという手回しのよさ。

なんというか、敵ながらアッパレで、ついテロリストのほうを応援したくなる。ちょっと知的で非情なリーダー、ハンスを演じているアラン・リックマンがいい。舞台では有名な俳優だそうだが、これが映画デビューとは思えないほどの存在感がある。ハンスの片腕で、短気なカールに扮しているバレエ・ダンサーのアレクサンダー・ゴドノフも、悪役にはもったいないほどカッコいい。やっぱりアクション映画は、悪党どもが強ければ強いほど魅力的だ。

バスルームのなかで裸足（高所恐怖症を治すため？）になっていたジョンは、テロリストの一人に発見され、32階に逃げる。追ってくるテロリスト。こうなれば、もうやるっきゃない。格闘の末にテロリストを倒して機関銃を奪ったジョンは、テロリストの死体をエレベーターでハンスに送りつけ、宣戦を布告する。一人また一人とテロリストをやっつけるジョン。超高層ビルならではのエレベーター・ホールや、通風口を利用したアクションが、スリリングに描かれている。

ジョンは屋上に出て、敵から奪った無線で警察に連絡する。やがてパウエル巡査部長の連絡で警官隊が出動。テロ集団の反撃にあった警察は、ついに装甲車をビルに突入させるが、敵の方が上手だ。用意しておいたミサイル弾をぶち込み、装甲車をぶっ飛ばす。まさに戦場。エスカレートするいっぽうの戦いにひたすら感心した。

このあたり、イッキにグイグイと引っ張っていく脚本のうまさは、一級品だ。そしてアクションの迫力はもちろん、登場人物のキャラクターを脇役までしっかり描いているジョン・マクティアナン監督の演出手腕も見逃がせない。たとえば、やたら威張っているくせにヨミが甘く、事態を悪くするばかりのロビンソン警視である。困ったことに、こういう上司がどこにでもいるんだよなあ。

まだいる。人質のなかにも、利口ぶってテロリストに取り引きを申し立て、逆にあっさり殺されてしまう奴。特ダネをスクープしたつもりで、ジョンの正体をわざわざテロリストに教えてしまうTVリポーター。「あ、こういう奴っているんだよな」というキャラクターの脇役一人ひとりがちゃんと生きていて、この映画を楽しませてくれる。

ところで、脇役といえば何といっても素晴しいのが黒人の巡査部長アル・パウエル。ジョンとパウエルは、無線で連絡を取り合ううち、お互いに仕事の不満や過去を話し、男の友情を抱き始めるのだ。刑事映画には相棒が欠かせないが、このパウエルは相棒役の変化したパターンでもある。「クロコダイル・ダンディ」でリムジンの運転手をやっていたレジナルド・ベルジョンソンのヒューマンな持ち味が光っている。そして、特にラストで、パウエルがそれまで抜けなかった拳銃を抜くシーンは、感動的である。

いよいよクライマックス。金庫から債券を奪ったテロ集団は、30数人の人質をビルの屋上に集合させる。屋上から逃げると見せかけて、実は人質もろとも屋上を爆破。そのすきに地下から逃げようという手の込んだ作戦なのである。その作戦に気づいたジョンは、屋上に駆け上り、人質を避難させる。爆破時間が迫る。あわや…。ジョンは、消防用ホースで体をしばりつけ、ビルの屋上から捨身のダイビング／すごいのひとこと。

正直いって、ブルース・ウィリスがここまでハードなアクションをこなすとは、思っていなかった。テレビの「こちらブルームーン探偵社」や「ブラインド・デート」では、半端な二枚目半の中年スターという印象しかなかった。ところがヤバいスタントを自分でこなし、血まみれになりながらの大熱演。頼りなげな男から、戦いのなかで逞しい男に変身していく。すっかり見直した。

最後は、妻ホリーをたてにしたテロ集団のリーダー、ハンスとジョンの対決である。ジョンは、仕方なく銃を捨てるが、その瞬間、背中にテープで張りつけたもう一丁の銃が火を吹くのだ。うーん、まいった。そして、死んだはずのカールが起き上る、もう一つおまけの大ラス。やってくれるじゃないか。というわけで、久しぶりにアクション映画のおもしろさを満喫したのである。

●アクション・アドベンチャー「ダイ・ハード」で、主演のウィリスはニューヨークの刑事ジョン・マックレーンを演じている。

「こちらブルームーン探偵者」のビデッド・アディソン役でお馴染みのウィリスは、ここでは13人のテロリストに命がけの決心で対決する、一味違った硬派の刑事を演じているが、かと言って決してユーモア感覚も忘れてはいない。

「僕はコメディ大好き人間なんだけど、皮肉なことにシリアスな役の稽古にばかり時間を割いている。だから、ほとんどの仕事がシリアスなものになっちゃう。でも、こういうタイプの映画には興味があるし、今までのイメージを変えるにはいいチャンスだよ」とは、ウィリス自身の言葉。

●今度のスタッフが驚いたのは、普通ならスタントに代役を任せるところを、自分自身でやりたいと買って出た彼のやる気と、それ以上に驚いたのはその能力であった。

「できる限り自分でやれば画面に迫力が出る。つまり、代役を使ってないから危険なシーンでもカメラが寄れるんだ。ただ、個人的には飛んだり跳ねたり、ロープでぶら下がったりしながら銃を撃ち、悪役を殺してヒーローになるってことは、自分の中でまだ生きつづけている少年の部分を満足させることが出来るから楽しい」と、ウィリス。

マクティアナン監督も、ウィリスの言葉を裏づけるように「スタントマンを使おうかっていう所まで(撮影が)来た時、僕はウィリスに、よくここまでやって呉れた。後は座







PRODUCTION NOTES



って見てて呉れと言ったんだが、彼は『いや、自分でやりたい』って言って、いきなり彼の中からニュージャージーのツッパリ少年の部分が出てきた。危険なことなら何でもやったという意味でなく、それは今までスタッフに全然見せなかった部分だったんだ」と語る。
　撮影の最後で、ウィリスは一歩間違えば命取りにもなりかねないスタントをやってのけた。それは、駐車場のてっぺんから、下のエアー・バックめがけて飛び降りた瞬間に、そのうしろで爆発が起こり、巨大な炎が上がるというスタントであった。
●この映画の舞台となるナカトミ・ビルの代役をつとめたのはロサンゼルスの新名所、センチュリー・シティのフォックス・プラザだ。撮影はこのビルの中やその周辺でも撮影されたが、ナカトミ社のメイン・フロアは20世紀フォックスのスタジオの中に作られ、入り組んだオフィスの迷路、街を一望のもとに見晴らす巨大な中央ロビーが作られた。
　このセットでは、フォックス・プラザのてっぺんから見おろしたのとそっくり同じのパノラマ風景が再現され、長さ100メートルにも及ぶ円形の景色が一点の狂いもなく西ロサンゼルスの地形を写し出した。
●小道具主任のトミー・トムリンソンと銃器スペシャリストのマイケル・パパックはシルバーに言われて、テロリストが使っている最新兵器のリサーチを行なった。「プレデター」、「リーサル・ウェポン」などで働いたトムリンソンと





パパックはアクション映画を熟知している。パパックは以前７年間ユニバーサル・スタジオの武器庫の管理をしていたし、自らもカリフォルニアのモンテベッロにパパック兄弟社という銃砲店を持っている。パパックは撮影が始まる３週間前に、銃をいかに安全に扱うかをすべての役者にのみこませた。
　ブルース・ウィリスが使用しているのはベレッタ92。これはアメリカ陸軍や多くの大都市の警察で45口径にかわって使いだした銃だ。アラン・リックマンが使っているのはH&K－Ｐ７M13。アレクサンダー・ゴドノフが使っているのは最新のスティル・オーグ攻撃用ライフルで、最近ではオーストラリア陸軍が使用しているものだ。また彼はピストルも持っているが、それはワルサーのＰＰＫだ。その他のテロリストが持っているのはＨ&Ｋ－ＭＰ５という口径９ミリのサブ・マシンガンで、現在ではＦＢＩやシークレット・サービスが使っている。

製作　ローレンス・ゴードン

ミシシッピーのベルゾーニ出身でチュレーン大学を卒業。ビジネス管理を専攻した。
60年代はテレビ界で活躍。68年にＡＩＰ映画の副社長となり、「デリンジャー」を製作。
ウォルター・ヒル監督と組み「ザ・ドライバー」を作り、以後、「ウォリアーズ」「48時間」「マイナー・ブラザース／史上最大の賭け」「ストリート・オブ・ファイヤー」など、ヒルと名コンビでヒット作を連発。
20世紀フォックス映画の社長に就任。「コクーン」「コマンドー」「エイリアン２」「ザ・フライ」など大ヒット作が誕生した。
社長業より、製作に情熱を持ちジョエル・シルバーと組んで現場に復帰。「プレデター」「ジャンピン・ジャック・フラッシュ」を製作。新人発掘の名人といわれている。

製作　ジョエル・シルバー

ニューヨーク大学に学び、製作者ローレンス・ゴードンのもとで働き、「ウォリアーズ」で共同製作者となり、「48時間」「ストリート・オブ・ファイヤー」を製作。
新しく設立したシルバー・ピクチャーズで、「コマンドー」「ジャンピン・ジャック・フラッシュ」「リーサル・ウェポン」「プレデター」と大ヒット作を連発。全世界ですべて１億ドル以上の興収をあげた。
企画中の作品には、シルベスター・スタローン主演"The Executioner"と、シュワルツェネッガー主演"Sergeant Rock"と、メル・ギブソン主演"Lethal Weapon 2"がある。

監督　ジョン・マクティアナン

87年の全米興収ベストテンに入った大ヒット作「プレデター」で、一躍、「エイリアン２」のジェームズ・キャメロンと共に、明日の秀才とクローズ・アップされた新鋭。
「ダイ・ハード」は、３本目の映画だが、ダイナミックなアクションは圧倒的で、殊に極限状況に追いつめられた人間描写のうまさは抜群。
ニューヨーク市に生まれ、ジュリアード学院と、ニューヨーク大学に学んだ。アメリカン・インスティチュートに所属し、そこで撮った試作"Watcher"で認められた。
テレビCMの仕事をしながら、シナリオを書き、86年にレスリー・アン・ダウン主演"Nomads"を初めて監督。カンヌ映画祭に出品され、「ブライアン・デ・パルマの"キャリー"以来のスタイリッシュな超自然サスペンスの秀作」と、批評家から絶讃された。
ジョエル・シルバーは、この才能に注目し、「プレデター」と「ダイ・ハード」を連続で演出させ、大成功を収めた。



●STAFF●

Directed by……JOHN McTIERNAN
Produced by……LAWRENCE GORDON and JOEL SILVER
Screenplay by……JEB STUART and STEVEN E. de SOUZA
Based on the novel by……RODERICK THORP
Executive Producer……CHARLES GORDON
Director of Photography……JAN De BONT
Production Designer……JACKSON DeGOVIA
Film Editors……FRANK J. URIOSTE, A. C. E. and JOHN F. LINK
Visual Effects Produced by……RICHARD EDLUND
Costume Designer……MARILYN VANCE-STRAKER
Casting by……JACKIE BURCH
Music by……MICHAEL KAMEN
Art Director……JOHN R. JENSEN
Set Decorator……PHIL M. LEONARD
Set Designers……E. C. CHEN, ROLAND HILL
Weapons Specialist……MICHAEL PAPAC
Makeup Supervisor……SCOTT H. EDDO

●スタッフ●

監　督……ジョン・マクティアナン
製　作……ローレンス・ゴードン、ジョエル・シルバー
脚　色……ジェブ・スチュアート、スティーブン E. デ・スーザ
原　作……ロデリック・ソープの小説〈新潮文庫刊〉
製作総指揮……チャールズ・ゴードン
撮　影……ジャン・デ・ボン
プロダクション・デザイン……ジャクソン・デゴビア
編　集……フランク・J・ユリオステ、ジョン・F・リンク
視覚効果製作……リチャード・エドランド
衣裳デザイン……マリリン・バンス＝ストレイカー
キャスティング……ジャッキー・バーチ
音　楽……マイケル・ケーメン
美　術……ジョン・R・ジェンセン
セット装飾……フィル・M・レナード
セット・デザイナー……E・C・チェン、ローランド・ヒル
武器スペシャリスト……マイケル・パパック
メーク・アップ監修……スコット・H・エドー



Hair Stylist……PAUL ABASCAL
Stunt Coordinator……CHARLES PICERNI
Special Effects Coordinator……AL Di SARRO
Special Visual Effects in 65mm……BOSS FILM CORPORATION
Video and Graphic Displays……VIDEO IMAGE

●CAST●

John McClane……BRUCE WILLIS
Holly Gennaro McClane……BONNIE BEDELIA
Sgt. Al Powell……REGINALD VELJOHNSON
Dwayne T. Robinson……PAUL GLEASON
Argyle……DE'VOREAUX WHITE
Thornburg……WILLIAM ATHERTON
Ellis……HART BOCHNER
Takagi……JAMES SHIGETA
Big Johnson……ROBERT DAVI

TERRORISTS

Hans Gruber……ALAN RICKMAN
Karl……ALEXANDER GODUNOV
Franco……BRUNO DOYON
Tony……ANDREAS WISNIEWSKI
Theo……CLARENCE GILYARD, JR.
Alexander……JOEY PLEWA

ヘア・スタイリスト……ポール・アバスカル
スタント・コーディネイター……チャールズ・ピサーニ
特殊効果コーディネイター……アル・ディ・サッロ
65ミリによる特殊視覚効果……ボス・フィルム・コーポレーション
ビデオ及びグラフィック・ディスプレイ……ビデオ・イメージ

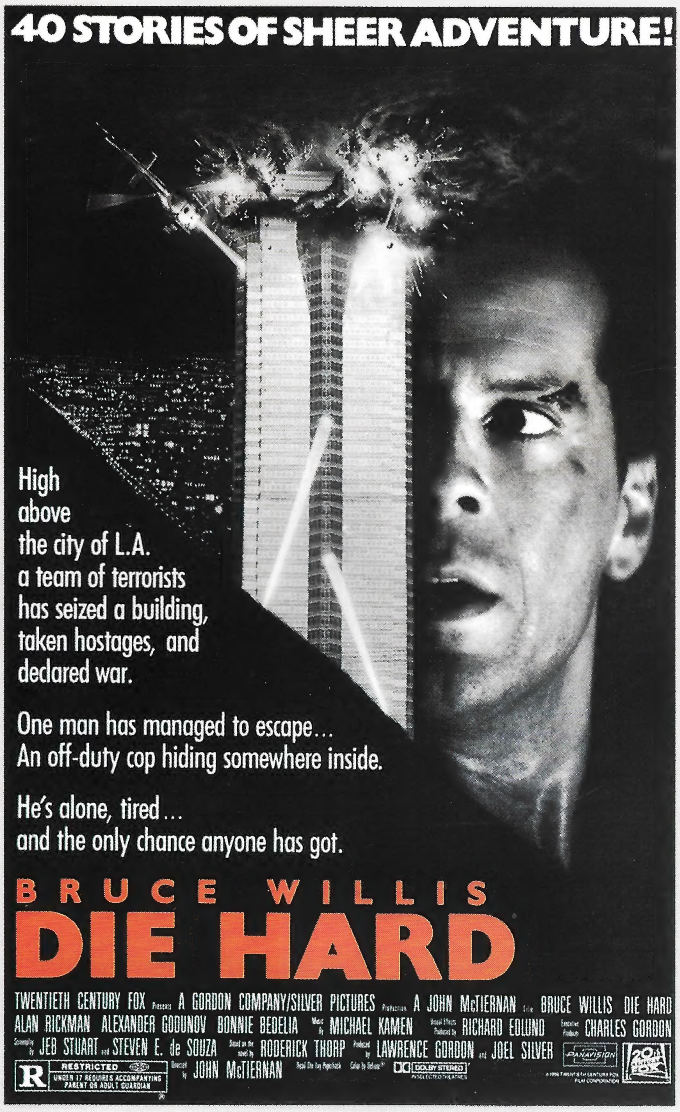
●キャスト●

ジョン・マックレーン……ブルース・ウィリス
ホリー・ジェナーロ・マックレーン……ボニー・ベデリア
アル・パウエル巡査部長……レジナルド・ベルジョンソン
ドウェイン・T・ロビンソン……ホール・グリースン
アーガイル……デボロー・ホワイト
ソーンバーグ……ウィリアム・アザートン
エリス……ハート・ボックナー
タカギ……ジェームズ・シゲタ
ビッグ・ジョンソン……ロバート・ダビ

テロリスト

ハンス・グルーバー……アラン・リックマン
カール……アレクサンダー・ゴドノフ
フランコ……ブルーノ・ドヨン
トニー……アンドレアス・ウィスニエフスキー
テオ……クラレンス・ギルヤード・Jr.
アレクサンダー……ジョーイ・プルーワ

平成元年2月3日印刷　発行所　東京都千代田区有楽町1―2―1　東宝出版事業室　編集　東京都千代田区有楽町1―6―1　㈱スタジオ・ジャンプ
平成元年2月4日発行　発行権者　東京都港区虎の門4―1―13　葺手ビル8F　20世紀フォックス極東映画会社　印刷所　東京都港区芝2―1―28　成旺印刷株式会社
定価 350円



BRUCE WILLIS

DIE HARD